

The Art of Sword Oratoria

はいむらきよたか

イラストレーションズ

試し読み用特別編集版

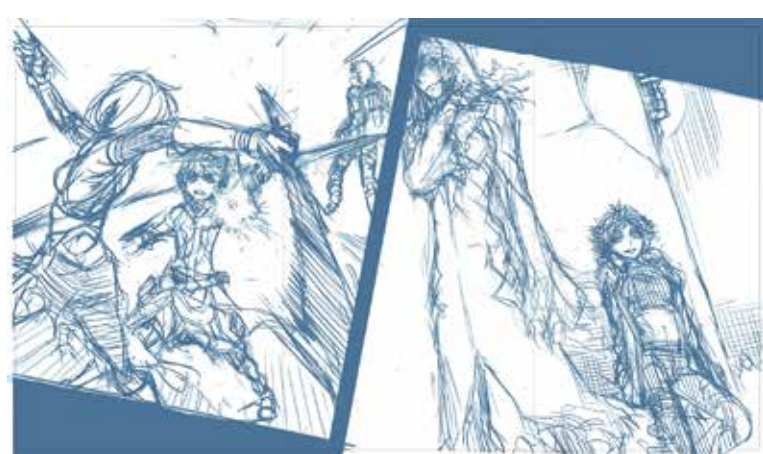
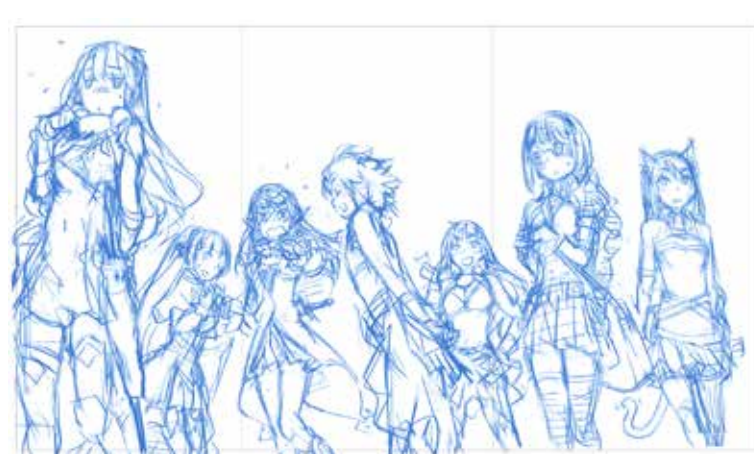
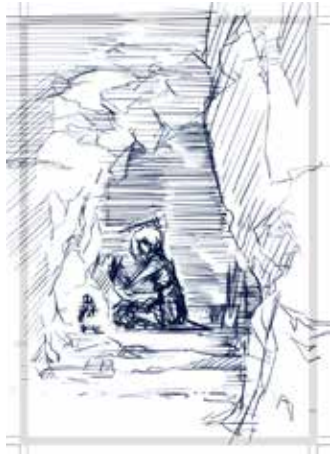




GA文庫「ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか外伝 ソード・オラトリア」7巻 三ツ折の口絵表 / 2016年12月
 これまで前面に出ていたひと達には一歩引いてもらって（アキズは除く）、これまでは後ろに居たりと違を前に出してみました。
 アキはともかく、リーネさんはココで描いておかないと、今後カラーで大きくフォーカスされる機会恐らく無いだろうな...と思ったので。

画集本編ではソード・オラトリアで描かれた
 すべてのイラストが収録されております！

GA文庫「ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか外伝 ソード・オラトリア」7巻 カバー&口絵ラフ / 2016年12月
 ラフの色合いや密度がバラバラなのは、SAI、Photoshop、仕事用マシン、低スペックサブマシン...と、作業環境が複数パターンに及ぶため。
 というかラフ案程度なら、もはや今ではタブレットやスマートフォンのお絵かきツールでも普通に描けますね。



キャラクター① 衣装は白、ピンク、水色など、ライトカラー主体?



■設定デザイン：レフィア・ウィリディス
 主人公のアイズさんは「白と青」が主要カラーであるため、それと対象になるような色を意識していました。
 初期案の黒ベース衣装案は「モノクロ挿絵のとき、服を黒ベタで埋められれば楽チンだね!」みたいな、作業工数を減じる意図も有りましたが、いま見ると開属性ちょっと強すぎですね。

なお、彼女の杖は「花の蕾」をモチーフにしたのですが、現在の愛称は「アスバラガス」。



・ハチガネでは無く「薄い銀の板」状、ヒモで括って調整します。
 ・ヒモは髪と同色、イラスト時は髪に紛れる形で省略されます。



・中心に挿入された宝石が青白く発光しています。



画集本編ではソード・オラトリアで描かれたすべての設定ラインが収録されています！

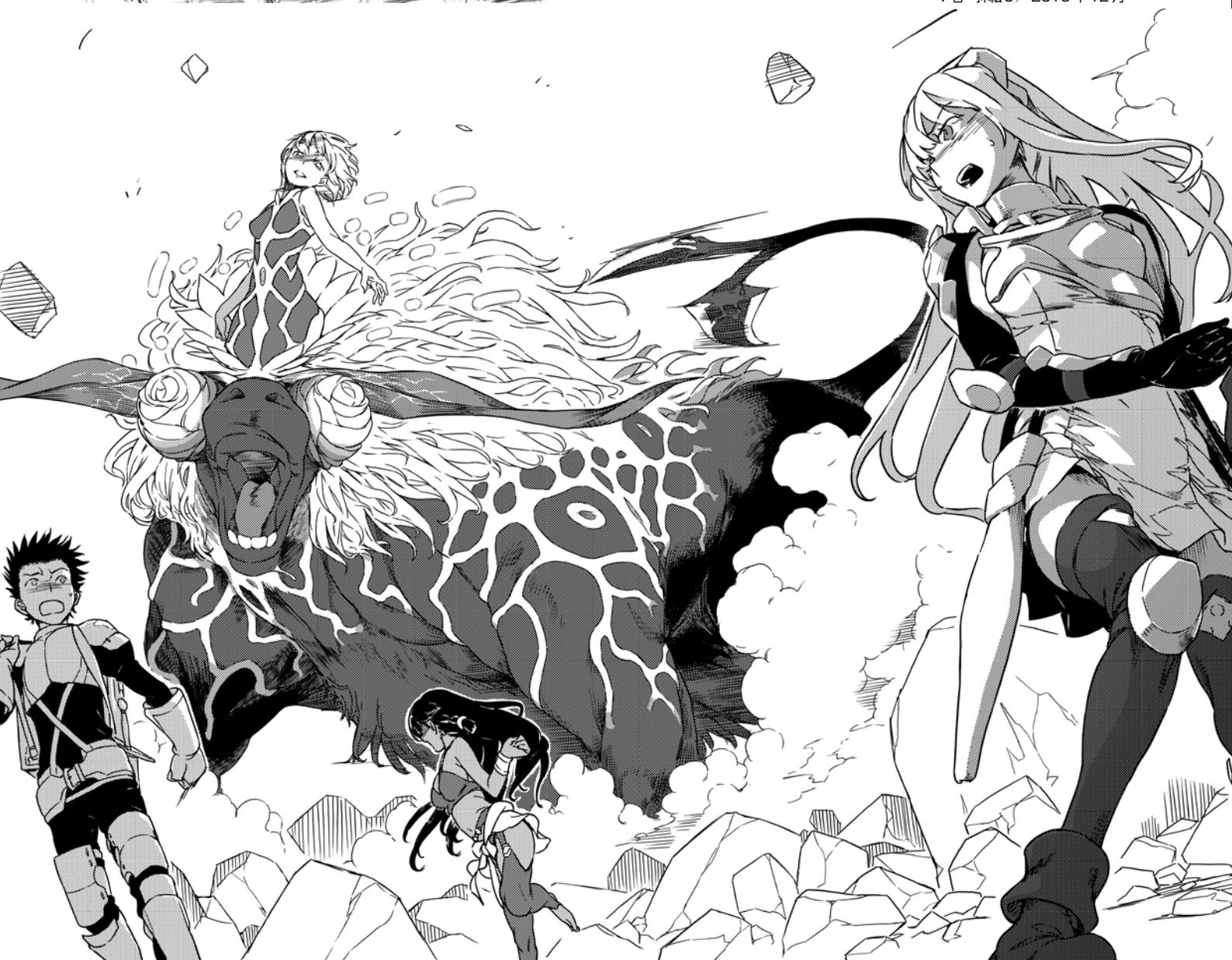
GA 文庫「ダンジョンに会いを求めるのは間違っているだろうか外伝 ソード・オラトリア」7巻 挿絵6ラフ / 2016年12月



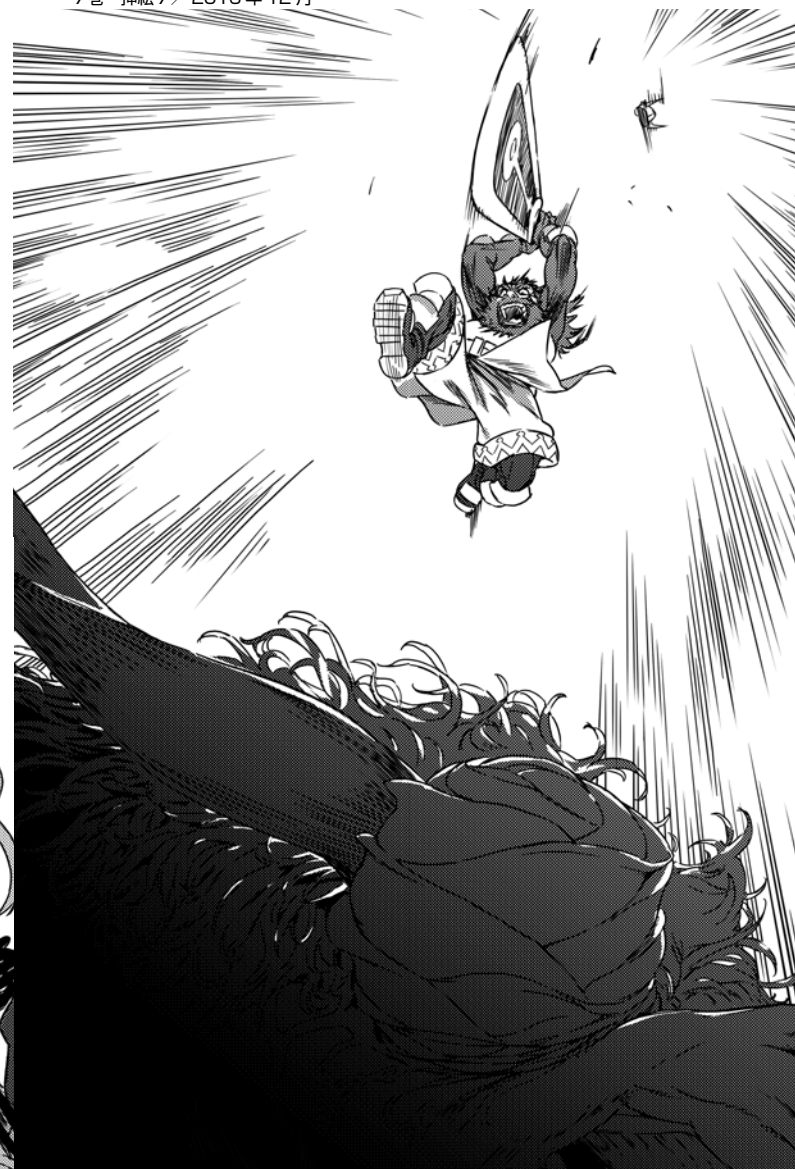
“巨大な物体（この絵の場合は敵）と人間が対決する構図”は、現在進行形ではいむらを悩ませる課題のひとつだったりします。このイラストの場合は「全員がこちらを向いている」ので、まだ何とかこなっているのですが…。

上記の「課題」の話については、後ほどの3巻モノクロ見開き挿絵の頁で詳細を述べます。

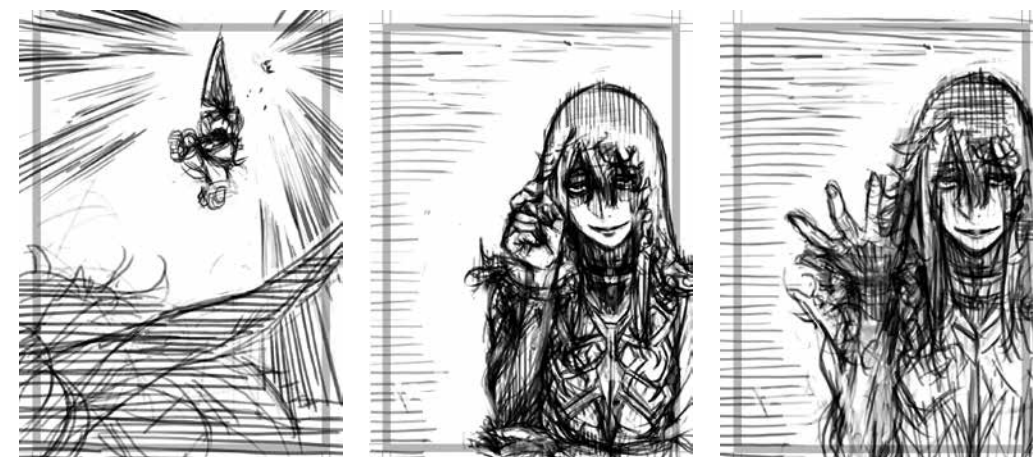
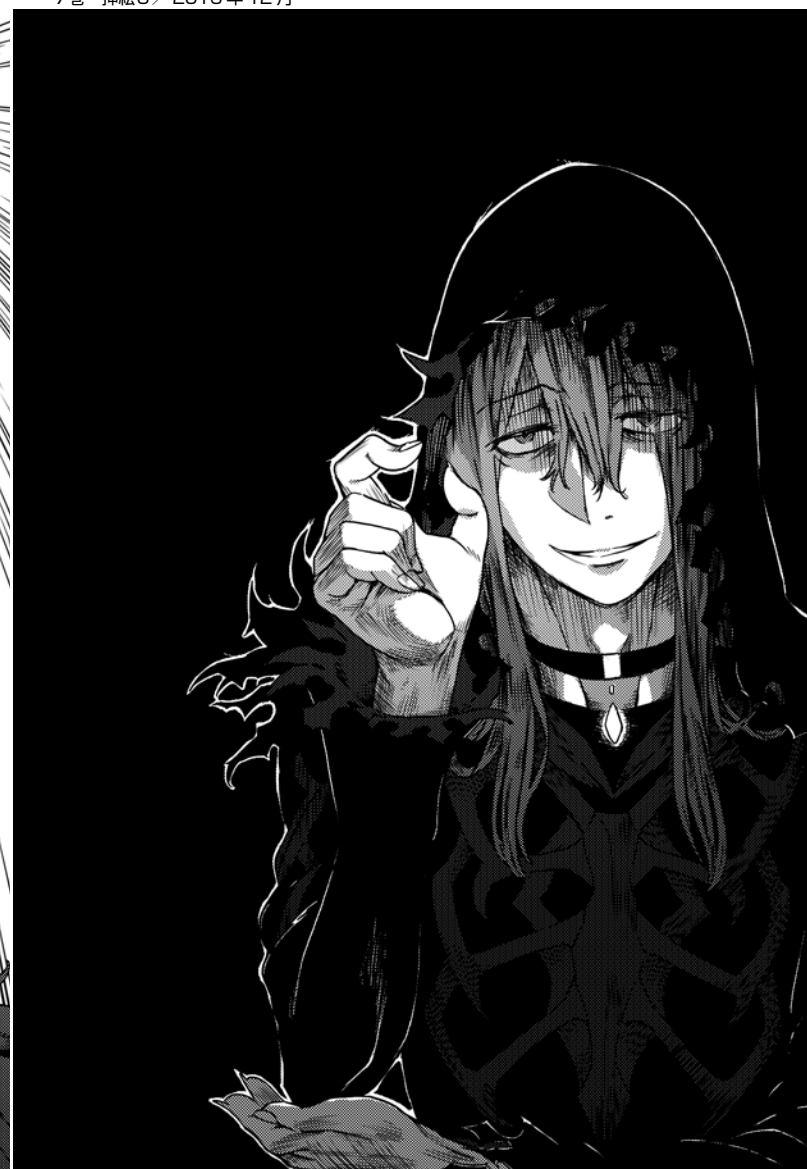
GA 文庫「ダンジョンに会いを求めるのは間違っているだろうか外伝 ソード・オラトリア」7巻 挿絵6 / 2016年12月



GA 文庫「ダンジョンに会いを求めるのは間違っているだろうか外伝 ソード・オラトリア」7巻 挿絵7 / 2016年12月



GA 文庫「ダンジョンに会いを求めるのは間違っているだろうか外伝 ソード・オラトリア」7巻 挿絵5 / 2016年12月



GA 文庫「ダンジョンに会いを求めるのは間違っているだろうか外伝 ソード・オラトリア」7巻 挿絵5・7ラフ / 2016年12月

画集本編ではソード・オラトリアで描かれたすべての挿絵が収録されております！

漫画と異なり、ラノベのイラストはどのカットも概ね「キャラを紹介する、キャラを推す」事が使命になるので、極端な引きや仰角 or 俯角など、“顔がちゃんと映らない角度”にはカメラを置けない事が多かったりしますが、見た目のインパクト大のガレスさんであれば、こんな風にキャラクターの表情が良く見えない引きの絵でも、キチンとキャラが立ちますね。

はいむらきよたか

大森藤ノ

(※この対談は3月某日、都内某所にて電話を介して行われました)

(※なおこの対談には一部ソード・オラトリア8巻のネタバレが含まれておりますので未読の方はご注意ください)

◆

— それでは対談を始めていただきたいと思います。

大森藤ノ (以下「大」) 「初めまして、大森藤ノです。今日はよろしくお願いします」

はいむらきよたか (以下「は」) 「初めまして、はいむらです。こちらこそよろしくお願いします」

大「うわっ、はいむらさんの声、すごくイケメンですね！」

は「いやいや、そんなことないですよ」

大「今日はお伺いしたいことがたくさんあります！」

は「ええ、なんでも訊いてください」

大「はいむらさんに初めてダンまちの絵を描いていたのはダンまち本編3巻限定版のゲストイラスト(※61ページ参照) だと思っておりますけど、それとオラトリアの1巻のカバーイラスト(※54ページ参照)を較べるとやはり絵が結構違いますね。限定版の方はヤスタさんの絵に寄せているというか……」

は「そうですね。意識して絵作りしたところはありますね。特に1巻はレフィーヤと一緒にいますから、アイズは対照的にクールに描いています。あとゲストイラストは頭身をちょっと下げて描いてますね」

大「あ、これ頭身下げてるんですか?」

は「はい、1巻カバーの方が頭身があがってるはずですよ」

大「確かに、言われてみればそうですね」

は「頭身の問題って結構難しいんですよ。頭身をあげると頭が小さくなってしまふので、キャラが目立たなくなってしまう……」

大「やはり媒体によって適切な頭身は違うという事では」

大「自分の中でエルフって金色とか緑ってイメージがあったので、最初にキャラデザをいただいた時は『おお!』ってなりました。発想になかったというか、新鮮な印象でした」

は「ああ、実は緑案も考えたんですけど、その段階ですでに九二枝さんのリヴェリアのデザイン(※71ページ参照)が決まっていたので、レフィーヤをここに被らせるわけにはいかないと思います」

大「確かに1巻の三つ折り口絵(※56ページ参照) 拝見していると、うまく色が分配されてるなあ、と思いますね」

は「そうですね、少なくとも同性で色が被ることは避けたいと考えてます」

大「あとレフィーヤと言えば、自分的にびっくりしたんですけど……レフィーヤの設定ラフ(※62ページ参照) のところに『彼女の杖は花の蕾をモチーフにした』ってはいむらさんのコメントがあって、自分もキャララフをいただいたときに『すごい、カッコいい!』って思っています」

は「ありがとうございます」

大「それでドヤ顔でレフィーヤの杖に『森のティアードロップ』って名前をつけたんですけど、はいむらさんのコメントを見たら『現在の愛称はアスパラガス』って続きがあって、ドヤ顔で名前を付けた自分は何だっただんだー! って、なりました(笑)」

— 同、笑い

は「あははは。もちろんモチーフは花の蕾だったんですけど、あとから見返したら、アスパラガスじゃん、ってなっちゃいました(笑)。でもアスパラガスは成長も早く伸びしろがあるので、そういう意味でもレフィーヤのキャラには合うんじゃないかってほ

しょうか?」

は「そうですね。うーん、これはちょっと説明が難しいんですけど……たとえば鳥山明先生のDr.スランプって作品があるじゃないですか」

大「はい」

は「あれに出てくるアラレちゃんって最初は4〜5頭身なんです。でも連載を経るにしたがって、緩やかに3頭身から2頭身になっていくんです」

大「それはどうしてなんでしよう?」

は「コマに収めるためですね。Dr.スランプって実はコマ数が結構多いんですよ。その小さなコマの中で如何にキャラを良く見せるかというところで2頭身になったんだと思います」

大「それは言われないと全然気づかないですね」

は「ライトノベルの挿絵も同じことで、小さな画面の中にどうキャラを収めるか……という仕事になりますね」

大「なるほど。ところで画集のコメントを拝見すると、はいむらさんはティオナとフィンが好きなキャラ、とい

んやり思っているところもありますね」

— おお、案外深い意味もあるんですね!

◆

大「イラスト的には自分は素人なんで、イラスト指定を出す時は『キャラが大勢いた方がにぎやかでいいかな』って思ってしまうんですが、はいむらさんはそうじゃないんですね?」

は「そうですね。基本的に僕はキャラの人数は絞り込んだ方が良いと思ってます。例えばカバーイラストですとMAXで3人が表示限界かなと考えてます。たくさんいるとその分、個々の情報がぼやけてしまうので」

大「そうですね。そうなるかと3巻限定版のカバーイラスト(※43ページ参照) は、はいむらさんの中では例外的な位置づけになるんでしょうか?」

は「あ、いや、そんなことはないですね。このイラストの場合は『アイズ+その他』という2要素なので。だからアイズ以外は意識的に色を落としているわけです」

大「本当に深いですね。でもこのカバー、すごくカッコいいですよ! 最初イラストをいただいた時に、こちらを通常版にして、限定版は今の通常版の方にしようか、本当に担当さんと相談したぐらいですよん」

は「あははは。あとカラーの背景はなるべく色を使わないようにしよう……というのも自分に課してますね。結局背景に色を多く使うと、その分キャラが埋もれてしまうので」

大「なるほどなるほど」

うことだったんですけど、3番目をあげるとしたら誰でしょう?」

は「3番目……うーん、レフィーヤでしようか」

大「ああ、確かにレフィーヤのキャラデザ(※62ページ参照) の数、すごいですもんね」

は「レフィーヤは外伝で一番最初に描いたキャラだったんですけど、彼女は物語の中でも重要なポジションを占めているので、ここで力を入れずしてどこで力を入れるんだぐらいの気合いで描きましたね」

大「それは原作者にとっては非常にありがたいです。こうして大量のキャラデザをいただけると、キャラのいろんな可能性が見られるというか……。はいむらさん的には最終的にFIXしたレフィーヤのデザインはやはり到達すべきところに到達した……という感じですか?」

は「そうですね。途中で黒とかいろんなパージョンがありましたけど」

大「あ、このちょっとドラキュラっぽいというか……」

は「僕の中ではレフィーヤのイメージは一言でいうと『学生』……特に『大学生』ぐらいのイメージなので

ちょっとシツクになってるところはありますね」

大「なるほど、確かにレフィーヤは二年前まで学区にいたので、学生というのは自分のイメージとも重なります」

は「あともうひとつ心がけていたのは『あまり冒険者っぽくない』ということですね。イメージ的には『頼んでもないのにむさい冒険者』も勝手に助けてくれそうという

イメージになりますね」

スペシャル
対談

この続きは6月15日発売予定の画集本編でお楽しみいただけます!

これまでの軌跡、果てしなき旅路

大森藤ノ

アイズはその日、都市を歩いていた。

特に理由があったわけではない。ただ何となく、晴れ渡った今日の空がとても綺麗に見えたから、ダンジョンへ行く前に気ままに歩いてみようと思ったのだ。

メインストリート、中央広場、街路、路地裏。

普段あまり赴くことのない都市の東区画をふらりと散策する。こんな道があったんだ、と新鮮な思いを抱いていると、見覚えのある景色が広がった。

「ここは……」

もう三カ月以上も前。

怪物祭のあった日、食人花と戦った通りの一角だった。

レフィーヤが『魔法』をもってアイズ達を助けた場所でもある。

モンスターに荒らされ破壊された通りはすっかり元通りとなっていた。砕かれた地面は整然と石畳が並べられ、大穴が空いて半壊していた建物も修繕済み。人々がのどかな喧騒を奏でながら道を行き来している。

そんな光景に感慨と呼べるものを覚えていた時、

「ヴァレンシユタイン氏……?」

「あ、本当だー！　こんにちはー！」

「……ギルドの、エイナさんと、ミイシャさん?」

二人のギルド職員と出会った。

ハーフエルフのエイナ・チュールと、ヒューマンのミイシャ・フロット。エイナは個人的な付き合いで、ミイシャは『ファミリア』として世話になっている受付嬢だ。

黒のスーツとパンツを着こなす美女達は、笑みと一緒に挨拶を交わしてくる。

「今日はお出かけですか?」

「はい……エイナさん、たちは……?」

「私達はこの区域の視察です。特にこの辺りは怪物祭の事

件で被害が出たので」

「あの時はモンスターが逃げ出しちゃって、本当に大変だったんだよねー！　どうなることかと思っちゃったー！」

エイナの後に言葉を続けるミイシャは「そうだっ」と言っていてその小柄な体を弾ませる。

「あの時のアイズさん、とっても格好良かったですよ。ばばば、ってどんどんモンスターを倒しちゃって！」

「ちょっとミイシャッ、失礼でしょ?　……ですが、あの時は本当に助かりました。あらためて、お礼を言わせてください」

「ありがとうございますー！」

砕けた接し方をするミイシャを注意していたエイナだったが、眼鏡の奥の緑玉色の目を細めて感謝を口にする。ミイシャにも頭を下げられたアイズはというと、戸惑ってしまった。

都市に身を置く冒険者として当たり前のことをしたまでとアイズ自身は思っているし、何より人に真っ直ぐ感謝されることに慣れていない。感情の乏しい表情が若干狼狽の色を滲ませていると、

「お姉ちゃん！」

「……?」

横から、獣人の少女が声をかけてきた。

最初は疑問を浮かべてしまったアイズだったが、母親連れの彼女の顔を見て、唐突に思い出す。

怪物祭の騒動の中で逃げ遅れ、アイズが食人花から庇った少女である。

「あのときは、ありがとう！　ずっとお礼を言いたかったの！」

少女はまさかの機会に興奮していた。身振り手振りを繰り返して喜びをあらわにしている。彼女の隣では母親が本当に感謝するように、お礼の言葉を重ねていた。

「お姉ちゃんたち、みんな綺麗で、かっこよかったよ！　私もお姉ちゃんたちみたいになりたいって、そう思っちゃっ

た眼鏡をかけたヒューマンの美女、そして複数の冒険者達だった。

ルルネ・ルイーにアスファイ・アル・アンドロメダ、【ヘルメス・ファミリア】の面々だ。彼女達は大きめの卓を囲んで酒を飲み交わしている。

ルルネを始め虎人のファルガー、小人族のメルル、ヒューマンのネリーなどは快くアイズを迎え、アスファイさえも微笑を投げた。

「皆さん、どうしてここに……?」

「んー……ちょっと暇ができたからさ、ここまで酒を飲みに行こうってことになったんだ。……いなくなったあいつ等の分まで、飲んでやるうぜ、って」

「……」

忘れもしない、24階層食料庫の事件。

モンスターの大量発生に端を発した『異常事態』を調査・鎮圧しようとアイズと【ヘルメス・ファミリア】は冒険者依頼に当たった。レヴィスを始め、第二の怪人オリヴァス・アクトとの死闘の中で犠牲者も出てしまった。他ならぬ【ヘルメス・ファミリア】の団員達だ。

この酒場はアイズとルルネ達が落ち合った場所だ。つまりあの冒険者依頼に参加した【ヘルメス・ファミリア】が最後に利用した酒場ということになる。ルルネやアスファイ達は逝った仲間を悼むために立ち寄ったのだろう。ともに肩を並べた冒険者達の顔を思い出すアイズが、つい悲しげな面持ちを浮かべていると、

「そんな顔するなって、【剣姫】。今日、私達はめそめそするためここへ来たんじゃないんだ」

「我々は先に進まなくてはなりません。過去を嘆いている暇はない。ですから——笑い飛ばしてやらなくては。この美味しい酒が飲めない彼等は、何て問抜けなんだと」

ルルネがあっけらかんと手を振り、アスファイもくすりと笑みをこぼす。ルルネの発言もそうだが、あの【万能者】が冗談を口にするとは思わず、アイズは目を丸くしてしまった。

た！　困ってる人を助ける、英雄様に！」

微笑ましそうにエイナとミイシャが見守っている中、目を見開いていたアイズは、今度はその感謝を素直に受け止めた。

顔を綻ばせ、目を細める。

「お姉ちゃん、みんなを守ってくれて、ありがとう！」

「……どう、いたしまして」

アイズが微笑み返すと、少女は頬を染め、破顔するのだった。

温かな地上と一度別れ、迷宮へ。

己を磨くためモンスターとの戦闘を重ねるアイズは、あっさりと【中層】の中間区まで至った。白水晶の光が満ちる18階層『迷宮の楽園』だ。

ダンジョンの安全階層には雄大な自然が広がっている。大森林や階層中央にそり立つ巨大樹を横目に、アイズは小休止も兼ねて『リヴィラの街』へ足を運んだ。

「よお【剣姫】！　久しぶりだなあ、調子はどうだ！」

「ポールスさん……」

岩と水晶が剥き出しの街の通りを歩いていると、宿場街の大頭ポールス・エルダーと出くわす。

悪人面の巨漢は、機嫌良げに腕を広げた。

「どうだ、お前等がモンスターどもと一緒に暴れ回ってくれた街もすっかり元通りだぜ！　これからもどしどし利用していけよ！」

この『リヴィラの街』も、怪人と食人花の事件に巻き込まれ、あわや壊滅の危機に晒された。だが今は上級冒険者達で賑わう宿場街本来の姿を取り戻している。いや、その気は以前以上かもしれない。

どうやら【ロキ・ファミリア】の『遠征』成功——男神・女神以来の59階層到達の偉業が今や同業者の情熱を促しているらしい。この宿場街は冒険者達が経営する、世界で最も美しい【ならず者達の街】であるから。

と、アイズはふと。

あることを思い出し、口を開いた。

だが、アイズはそこで気が付いた。確かに彼女達は喪った仲間を悼んでいる。それは酒を飲めずに悔しがっている仲間を笑い合う、冒険者流のやり方だ。

「見ているか?　と天に乾杯する、ならず者達の不器用なやり方。」

「【剣姫】、もし貴方も彼等を想ってくれるなら、先へ進んでください。それが、逝った彼等の手向けになります」

「私達は、冒険者なんだからな」

アスファイとルルネが目細める。

「あいつ等が見れなかった光景を、『未知』を」

「アイズさんが見てあげてください」

「それで……空の向こうに、教えてあげてください」

ファルガーが、ネリーが、メルルが笑いかける。

追憶の切なさを隠す彼等の笑顔に、アイズはゆつくりと頷いた。

「はい……」

この続きは6月15日発売予定の画集本編で
お楽しみいただけます！

はいむらきよたかイラストレーションズ The Art of Sword Oratoria 試し読み特別編集版

※この試し読み特別編集版は画像を圧縮しておりますのでご了承下さい。画集本編には無圧縮のきれいな画像が収録されております。